

2 Up-2 江戸時代中、後期の住まいについての研究 —家相の文献を通して—（第九報）

東京家政学院大学

村田 あが

目的 昨年度の本研究第8報に続き、本報告では江戸時代中、後期に多数出版された家相文献の著者が多くの影響を受けたと考えられる、中国からの舶来書『居家必用』に焦点をあて、その内容の分析を試み、日本の家相文献への波及効果について解明する。

方法 『家政学文献集成・続編・江戸期Ⅶ』所収の、寛文13年（1672）京都松柏堂刻本『居家必用』（中国の元・明・清三代にかけて民間に読まれた家庭人・官吏としての生活の知恵をまとめた教養書。作者は不明。）から、住宅の建築法について記述した部分である「丁集」の内の「宅舎」の項を読み下し、昨年度までに報告した江戸時代中、後期の家相文献の内容との比較検討をする。

結論 『居家必用』「宅舎」の項の内容は、『周書秘奥造営宅経』から引用した、住宅、庭、門、井竈、窓、廁などのあるべき姿と、「興工造作日」「入宅移居」に関する暦上の吉凶の二部構成であり、①敷地の選び方では、「四神相応」に基づいた説明がなされる②敷地、樹木、井竈、廁に関する禁忌が多い③後半の工事日程では暦が全てを左右する点が特徴である。これらは、④「家を南向きにする」や「清潔に保つ」などの常識的・道徳的な解釈や⑤四神相応などの方位に関する禁忌（但し特別の方位を忌むことはない）⑥暦による禁忌により説明され、総体的に表現は簡潔である。江戸時代の家相文献と比較すると、①テキストの構成②方位別吉凶や暦による吉凶判断などは大いに影響を受けており、全く同じ表現なども散見するが、③鬼門などの特別の方位を忌む点や④畳数の吉凶などの日本風アレンジ⑤崇りや戒めの表現の複雑化⑥具体例の挿入が相違点として上げられる。